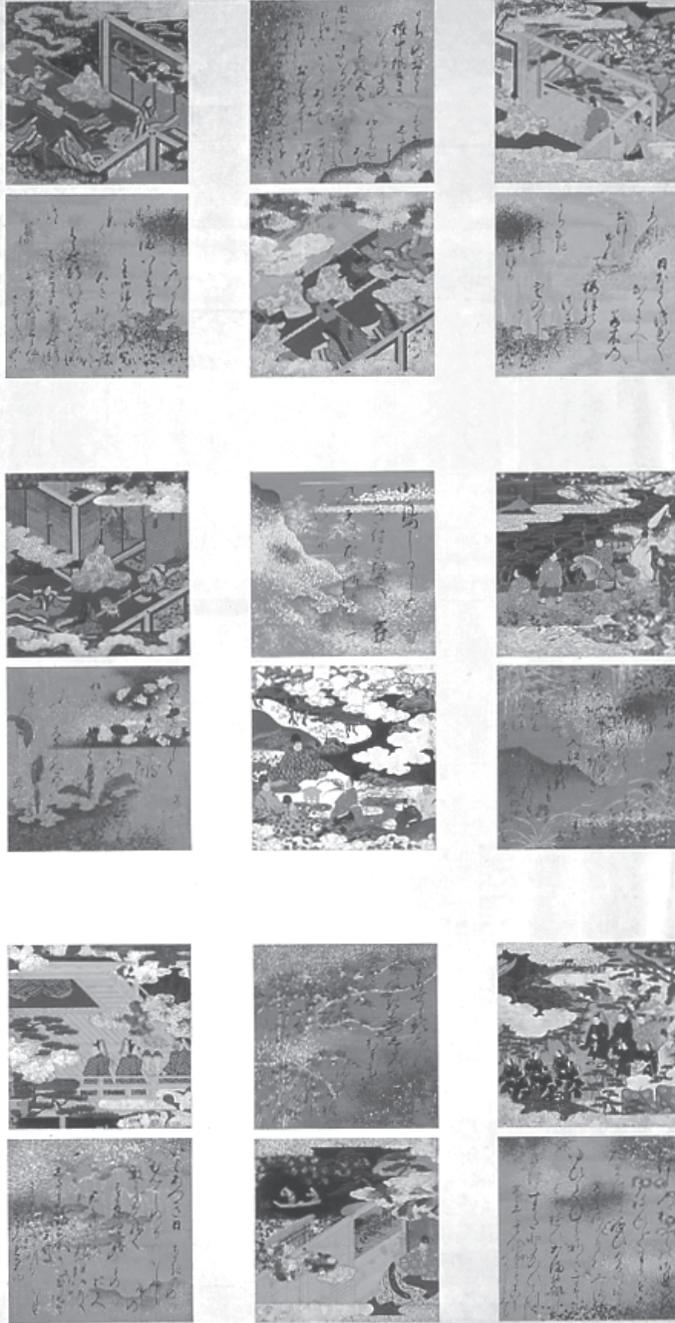


齋宮歴史博物館蔵
源氏物語図色紙貼交屏風
右隻 第一扇



斎宮歴史博物館蔵 源氏物語図色紙貼交屏風
右隻 第二扇

斎宮歴史博物館蔵

源氏物語図色紙貼交屏風について（上）

木戸 久二子（日本文学）

はじめに

本稿では、斎宮歴史博物館（三重県多気郡明和町）の所蔵品のうち、二曲一雙の源氏物語図色紙貼交屏風（以下、「斎宮本」と略称する）を取り上げる。まず、二〇〇一（平成十三）年十月から十二月にかけて開催の特別展「斎宮の読んだ物語〜王朝の姫君 教育事情〜」の図録^①により、書誌等を紹介する。

源氏物語図色紙貼交屏風 二曲一雙

紙本墨書

縦一七二・八 横一七五・〇

色紙縦二〇・〇 横二〇・〇

安土桃山時代

登録番号B〇〇三三三三、左隻は二〇〇〇（平成十二）年十一月二十九日、右隻は二〇〇一（平成十三）年八月二十八日の収蔵である。なお、二〇〇五（平成十七）年三月十七日には、三重県指定有形文化財（絵第三十五号）に指定された。

絵は極めて緻密で優美であり、和泉市久保惣記念美術館蔵「源氏物語手鑑^②」（以下、「久保惣本」と略称する）や京都国立博物館蔵「源氏物語画帖^③」（以下、「京博本」と略称する）と近似することから、土佐光吉またはその主宰する工房の作品と考えられている。河田昌之氏は、「斎宮本」は光吉系源氏絵に基礎を置きながら、

人物表現や空間処理、モチーフ配置などから光則系源氏絵や如

慶筆本との関連が指摘できる図が含まれ、複数の作風をもって形成された土佐派源氏絵といえる。

と述べられ、「制作が寛永期の十七世紀前半と想定される本作は、光則を中心とした土佐派絵師による色紙形源氏絵の新展開の一つであった」とされている。^④

書は「斎宮の読んだ物語〜王朝の姫君 教育事情〜図録」には、「後陽成天皇をはじめ八条院智仁親王、曼殊院良想法親王、大覚寺空性法親王、青蓮院尊純法親王、烏丸光広、冷泉為頼など十人の寄合」と紹介されている。ただ、落款や極め等は一切なく、河田昌之氏は、

青蓮院尊純、八条院智仁、四辻季継の筆跡と関連する書風が看取されたことにより、本作の制作環境を考える上で親王や公家という貴顕の存在を視野に入れなければならないことになるであろう。と述べるものの、「視覚的な特徴を優先し、関連作品を対象にした恣意的な類推によるものであるため、あくまでも仮説に過ぎない」。「現段階では推論に止まる」と断っている。

「源氏物語」五十四帖の中の三十六帖から一場面ずつを選び、絵と詞書の色紙一枚ずつを縦に一組として、二曲屏風の一隻に縦三組・横六組の十八組ずつ、一雙で計三十六組貼り付けている。制作当初は五十四帖分あったものが、屏風に貼り付けられる際に三十六という数に調整されたものであると推測される。

右隻には、右上から順に（数字は五十四帖の通し番号）、1 桐壺・2 帚木・3 空蟬、4 夕顔・5 若紫・6 末摘花、7 紅葉賀・8 花宴・9 葵、12 須磨・13 明石・14 澁標、17 絵合・18 松風・19 薄雲、22 玉鬘・23 初音・26 常夏の十八組が、一・三・五列目は詞書の上に絵を下に、二・四・六列目は絵の上に詞書を下にして貼られている。欠けているのは、桐壺から常夏までの二十六帖のうち、10 賢木・11 花散里・15 蓬生・16 閑屋・20 朝顔・21 少女・24 胡蝶・25 螢の八帖分ということになる。

一方の左隻には、右上から順に27 篝火・28 野分・30 藤袴、31 真木柱・32 梅枝・33 藤裏葉、34 若菜上・35 若菜下・36 柏木、37 横笛・38 鈴虫・

39夕霧、42匂宮・44竹河・45橋姫、46椎本・47総角・50東屋の十八組が、やはり一・三・五列目は詞書を上に絵を下に、二・四・六列目は絵を上、詞書を下にして貼られている。欠けているのは、第二十七帖の篝火から夢の浮橋までの二十八帖のうち、29行幸、40御法、41幻、43紅梅、48早蕨、49宿木、51浮舟、52蜻蛉、53手習、54夢の浮橋の十帖分である。

存在しない十八の帖およびその通し番号を眺めてみると、まず、連続しているものが多いことに気づく。十八帖のうち前もしくは後とつながっていないのは、行幸と紅梅の二帖のみである。屏風に貼られる以前の色紙の形態が関係しているのであろうか。描かれている場面としては、めでたい賀の場面や季節感豊かな四季の場面等、王朝文化を髣髴とさせるような見栄えのする帖が多く欠けているように思われる。賢木・関屋・胡蝶等の巻には大画面の源氏絵の屏風も現存している。また、御法と幻の場合は、紫の上の死と源氏の出家が描かれるという不吉な巻を忌避する気持ちがあるのかもしれない。

頁数の関係上、以下、本稿では右隻を取り上げる。まず、右上から下に向かって順に詞書は翻字し、その本文校異を掲げる。絵は場面を述べ、他の源氏絵との比較検討を試みる。

一 詞書

詞書は、普通に右から左へ書き流したものの、散らし書き、上下二、三段に分けて書いたものの三種が混在する。

① 桐壺

その頃高麗人のまられるか 中に
かしこき相人有けるを きこしめして
宮の中にめさん事は 宇多の御門
の御いましめあれはいみしう 忍ひて

鴻臚館につかはしたり御 うしろみ
立て右大弁の子のやうにおもは せてあてたてまつる

② 帚木

おほとなふらちかくて文ともなと み
給ちかきみずしなる色くくの

かみなる文ともをひきいて、 中将

わりなくゆかしかれは さりぬ

へきすこしはみせむ

かたはなる へきも

こそとゆるし給

ねはその

うち と けて

かたはら

いたしと

おほしめさん

こそゆかし けれ

③ 空蟬

おくの人はいとしつ

かにのとめてまち

給へやそこはちにこそ

あらめこのわたりのこうを

こそなといへといて此

たひはまけにけり

④ 夕顔

きなるす、しのひとへはかまな
かくきなしたるわらはのおかしけ

なる出きてうちまねくしろき
あふきのいたうこかしたるをこれに
をきてまいらせよ枝もなさけな
けなめる花をとてとらせたれば門
あけて惟光朝臣のいてきたる
してたてまつらす

〔校異〕「惟光朝臣の」三条西家本―諸本「これ光のあそん」

⑤若紫

すゝめのこをいぬきか
にかしつるふせこのうちに
こめたりつる物をとて いと
くちをしとおもへりこの
みたるおとなれいの心
なしのかゝるわさをし て
さいなまるゝこそいと
こゝろつきなけれ

⑥末摘花

もろともに大内山は出つれと
入かたみせぬいさよひの月
とうらむる も
ねたけ れと
この君と
見給に
すこし
おかしう なりぬ
人のおもひ よらぬ
ことよと にくむ く

里わかぬかけをはみれと行月の
いるさの山をたれか尋ぬる

⑦紅葉賀

源氏の中将は
青海波をそ まひ
たまひけるかたて
には大とのゝ頭 中将
かたちようい
人には こと なるを
たち ならひ ては はなの
かた はら の
みやま 木 なり

〔校異〕「人には」―諸本「人に」

⑧花宴

おほろ月夜にゝるものそ
なきとうちすしてこなた
さまにはくるものかいと
うれしくてふと袖を
とらへ給ふ女おそろ
しと思へるけしきにて
あなむくつけこはた そと
のたまへと何かうと
ましきとて
ふかき
夜のあは
れを しる
も

いる

月の

おほろけ

ならぬ

契と

そ

おもふ

⑨葵

つゐに御車ともたて

つゝければ人たまひの

おくにをしやられて物も

みえず心やましきをはさる

物にてかゝるやつれをそれと

しられぬるかみしうねたき

事かきりなし

⑩須磨

日なかくつれく

なるにうへし

若木の

桜ほのかに

さきそ

めて

空のけしき

うらゝか

なるに

よろつの

こと

おほし

出られ

て

うちなき

たまふ

おり

おほかり

⑪明石

道のほども

よもの浦々

みわたし 給ひて

おもふとち見ま ほしき

入江の 月影 にも

まつ こひしき

人の御 事を

おもひ出きこえたまふに

やかて馬ひき

すきて をもむき

ぬへく

おほ

す

秋のよ の

つきけの こまよ わかこふる

雲るに かけれ

時のま も 見む

〔校異〕「雲るに」肖伯本―諸本「雲るを」

⑫ 濔標

かはらのおと、の御れいを
まねひてわらはすいしん
たまはり給ひけるいとおかし
けにさうそきみつら
ゆひてむらさきすその
もとゆひなまめかしう
たけすかたと、のひうつくし
けにて十人さまことにいま
めかしうみゆ

〔校異〕「わらはすいしん」―諸本「わらはすいしんを」

⑬ 絵合

うちのおと、
権中納言ま
いり給ふその 日
そちの宮も
まいり給へり
いとよし ありて
おはする中 に
絵をなんたて、
このみたまひ けるに
よりおと、の
したに
す、め
給けるにや
あらん
ことくしき
めしには

あらて

殿上 に

おは する を

おほせ こと ありて

〔校異〕「中に」三条西家本―肖伯本「なかに」―諸本「うちに」

「絵をなんたて、」三条西家本・肖伯本―諸本「糸を」

「このみたまひけるにより」三条西家本―諸本「このみ給へは」

「給けるにやあらん」三条西家本・肖伯本―諸本「給へるや
うやあらん」

⑭ 松風

小鳥しるしはかり
ひき付させたる萩
のえたなとつとにして
まいれり

⑮ 薄雲

いさりせし影忘れぬか、り火は
身のうき舟やしたひきにけん
おもひ こそ
まかへ られ
侍れと
聞ゆ れ と
あさ からぬ
したの
思ひ
をしらね はや
なをか、り火の
かけは さはける

⑬玉鬘

こ、かしこのうちとのより
まいらせたるうちもの
とも御覧しくらへて
こきあかきなさま くを
えらせ給つ、御そひつころ
はこともにいれさせ給て
おとなひたる上らふとも
さふらひてこ れは
かれ はと
とり くし
つ、 いる

⑭初音

わさとかましく
あつめたる ひけこ
ともわり こなと
たてまつり 給へり
えならぬ五え うの
枝にうつる 鶯も
思ふ心あらんかし
とし 月 を
松に ひ
かれ て
ふる 人 に
けふ うくひ すの
はつねきかせよ

⑮常夏

いとあつき日
ひんかしのつり
殿にいて給て
す、み給中将 の
君もさふらひ 給ふ
したしき殿上人 あまた
さふらひてにし川より
たてまつれるあゆ
ちかきかはの
いしふし やうの
もの
おまへ にて
てうして ま
いらす

二 絵

①桐壺

鴻臚館にて高麗の相人、右大弁に同伴された源氏の相を見る。外に牛車と供人二名(隨身と童)。

久保惣本・京博本ともによく似ているが、久保惣本は従者が四名で京博本は三名。京博本のみ車の向きが建物正面と平行である。また、源氏の位置が久保惣本・京博本は部屋の左側、相人のほうに寄っているが、斎宮本では部屋の中央に描かれている。

②帚木

いわゆる「雨夜の品定め」の場面。五月雨の夜、源氏の宿直所を頭中将が訪問。故ありげな消息などに興味を示す。左奥が源氏、その右

横に頭中將。源氏の後ろに厨子が見え、「いろいろの紙なる文ども」が源氏と頭中將の前に置かれている。そこへ左馬頭（手前左）、藤式部丞（手前右）が加わり女性論議に花を咲かせる。

久保惣本（帚木一）とのみ一致する。

③空蟬

源氏、小君の手引きで中川の邸に忍び、空蟬と軒端萩が碁を打つ姿を隙見する。碁盤を挟んで右側が、右手で目を数えている軒端萩、左側が空蟬。

京博本とのみ一致するが、齋宮本では燈台の位置が碁盤の向こうから手前に変わり、女たちの向こうに描かれていた厨子が左奥に移動している。

④夕顔

源氏、乳母の家の隣家の垣に咲く夕顔を隨身に手折らすと、内より童女が出てきて、花を載せるための扇を差し出す。半藪を上げたところより女たち、源氏の車を眺める。

久保惣本（夕顔一）とのみ一致する。久保惣本は門の外の車の傍らに従者三人と源氏らしき男を描くが、齋宮本は童一名のみ。

⑤若紫

源氏、北山の僧都の坊で、逃げた雀を追って縁先に出た美少女（紫の上）を垣間見る。縁に少納言と犬君、室内に尼君と紫の上。小柴垣の隙間からそれを見ている源氏、後ろに従者一人。

京博本とのみ一致するが、左右を反転させた構図になっている。

⑥末摘花

源氏、常陸宮邸に忍んで琴の音を聞いた後、透垣の陰で源氏の後をつけてきていた頭中將を見つける。邸内では琴を弾く末摘花が御簾越

しに見える。庭に紅梅と松。

久保惣本・京博本ともに一致する。

⑦紅葉賀

朱雀院行幸の日、源氏、頭中將と青海波を舞う。左側、白菊を挿したほうが源氏。

久保惣本・京博本ともに異なる。

⑧花宴

桜花の宴の果てた月夜、源氏、弘徽殿の細殿で「朧月夜に似るものぞなき」と歌いながら歩いてくる女（朧月夜）に逢う。

京博本と一致する。京博本では右肩下がりの細殿の線が齋宮本では右肩上がりになっている。二人の距離も近くなり、源氏の手が女のほうに伸ばされていて今にも女を捕らえようとするところか。

⑨葵

いわゆる「車争い」。齋院の御禊行列見物の葵の上二行、やはり見物に来ていた六条御息所の車と遭遇、召使たち御息所の車を押しつける。

久保惣本・京博本と一致する。

⑩須磨

春となり、昨年須磨に來た際植えた若木の桜が咲き初めたのを眺め、京に残してきた人々を思う。室内に源氏、簀子縁に従者二人。

久保惣本（須磨二）・京博本ともに一致する。左奥の萱葺き屋根、右奥の海辺の苦屋、右の「竹編める垣」等、ほぼ同じだが、京博本では画面中央だった桜の木が齋宮本では右に寄り、中央に松の木が一本書き込まれていて久保惣本に近い。

⑪ 明石

八月十三夜、源氏、馬に乗り、入江沿いに明石の君の岡辺の家へ向かう。従者四人（うち童、隨身、白丁一人ずつ）。久保惣本・京博本ともに異なる。堺市博物館蔵「源氏物語色紙絵」^⑤と近似する。

⑫ 滯標

秋、源氏は供人を整え、住吉詣をする。童隨身六人、裾を童に持たせた源氏。それ以外に男四人（うち白丁一人、赤色を着ているのは良清か）。源氏の栄華を目の当たりにした明石の君の住吉詣の舟、そのまま住吉の浜を去る。

久保惣本（滯標二）・京博本ともに一致する。京博本は童隨身四人で久保惣本・斎宮本より少ない。

⑬ 絵合

冷泉帝御前での絵合。

久保惣本・京博本と近似する。人物の位置等はほとんど変わらないが、細かく見ると、源氏らしき男がちょうど絵巻を広げているところ。自身の須磨の絵日記を披露する場面か。

⑭ 松風

源氏、桂殿にて遊宴。迎えの人々、萩の枝に小鳥をつけて奉る。

久保惣本・京博本ともに一致する。

⑮ 薄雲

嵯峨の念仏にかこつけて大堰に明石の君を訪れた源氏、鵜舟の篝火が見え隠れする大堰川の風情を眺め、悲しむ明石の君を慰める。

久保惣本（薄雲二）・京博本ともに一致する。

⑯ 玉鬘

年の暮れ、源氏と紫の上、とりどりの衣裳を婦人たちに配るため、選び整える。

久保惣本（玉鬘二）・京博本ともに一致する。

⑰ 初音

明石の君より鶯をつけた五葉松を飾った髻籠につけて明石の姫君に贈られた手紙を源氏見る。簀子縁、御簾越しに見える女童、子の日なので、庭で引いた小松を手を持つ。

京博本と一致する。

⑱ 常夏

夏の暑い日、源氏、釣殿で涼をとり、川魚など料理させて、内大臣の子息たちと歓談する。

久保惣本・京博本ともに一致する。ただし、斎宮本は室内の源氏の上半身を軒で隠して描かない。

以下、斎宮本と久保惣本・京博本の絵と詞書の一致・不一致を表にしてみる。

三

| | 卷 | | | | 絵 | 詞書 |
|----|---|---|---|---|---|----|
| | 久 | 京 | 久 | 京 | | |
| 桐壺 | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | ◎ |
| 帚木 | ◎ | ◎ | × | × | | |
| 空蟬 | ◎ | ◎ | × | × | | |
| 夕顔 | ◎ | ◎ | ○ | ○ | | |
| 若紫 | ◎ | ◎ | × | × | | |

| 末摘花 | 紅葉賀 | 花宴 | 葵 | 須磨 | 明石 | 漂漂 | 絵合 | 松風 | 薄雲 | 玉鬘 | 初音 | 常夏 |
|-----|-----|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ○ | × | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ |
| ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ○ | × | × | ○ | ○ | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | ○ |
| ○ | × | ○ | ○ | × | × | × | × | ○ | × | ○ | ○ | ○ |

京博本と齋宮本は、絵にした場面が一致しても詞書は異なる箇所を書いている場合が少なくない。一つには、齋宮本は絵とは厳密に言う

と異なる部分の本文を書くことがま見られるようである。

たとえば、帚木巻の「雨夜の品定め」の場面ではすでに男四名が描

かれているが、詞書は源氏と頭中将の二人のみで、左馬頭と藤式部丞はまだ加わっていない部分の本文である。また、紅葉賀巻では、絵は朱雀院への行幸当日の絵であるが、詞書は紅葉賀巻の冒頭、試案の日

のそれである。

注

(1) 『特別展「齋王の読んだ物語」王朝の姫君 教育事情』平成十三年、齋宮歴史博物館。

(2) 『和泉市久保惣記念美術館源氏物語手鑑研究』平成四年、和泉市久保惣記念美術館。

(3) 『京都国立博物館所蔵源氏物語画帖』平成九年、勉誠社。

(4) 河田昌之「光吉系色紙形源氏絵の行方―齋宮歴史博物館蔵「源氏物語絵色紙」の紹介をかねて」(三田村雅子・河添房江編、源氏物語をいま読み解く①『描かれた源氏物語』平成十八年、翰林書房)。

(5) 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』平成九年、学研教育出版。

― 児童教育学科 初等教育 ―